

現職保育者のための表現に関する研修の実態調査

千葉大学 駒久美子
國學院大學 島田由紀子

I. 研究の背景と目的

平成27年12月、中央教育審議会答申「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について」では、教員が備えるべき資質能力について、使命感や責任感、教育的愛情、教科や教職に関する専門的知識、実践的指導力、総合的人間力、コミュニケーション能力など不易の資質能力に加え、自律的に学ぶ姿勢を持ち、キャリアステージに応じた資質能力を高めることや、情報を適切に収集・選択・活用する能力や知識を有機的に結びつけ構造化する力、学校を取り巻く新たな教育課題に対応できる力量などが求められている¹⁾。このように教員が高度な専門性をもった職業人として、学び続けるためには、研修の整備が喫緊の課題であることが、以下の先行研究から考えられる。

一般社団法人保育教諭養成課程研究会が2015年度から2018年度まで文部科学省の委託を受け実施した調査では、幼稚園教諭等の意識や実態、さらに研修ニーズについて明らかにしている²⁾。2019年度の調査では、都道府県、政令市、中核市における研修の実態調査を行っている³⁾。これらの調査では、保育経験年数にかかわらず、「特別な支援を要する子供への対応」の研修ニーズが高く、保育経験年数5年から8年に「教育・保育における遊び」といった表現に関する研修ニーズが高いことが読み取れた。しかし、「教育・保育における遊び」、すなわち表現に関する研修に特化した実態調査はこれまでほとんど実施されていない。

現職保育者の表現に関する研修については、音楽、造形、身体のように、それぞれの専門に

分化した実技研修が多くみられる(清水, 2013、伊藤, 2015、本山・渡邊, 2018/2021、中島, 2020等)。音楽、造形、身体といったそれぞれの表現領域に関する専門的知識や技能の研鑽を積むことは重要である。しかしながら、日常の保育では、こうした専門的知識・技能を統合し、総合的な表現を指導する実践力が求められている。それは、幼稚園教育要領に示された「生活の中でイメージを豊かにし、様々な表現を楽しむ」や、保育所保育指針に示された「生活や遊びの中で様々なものに触れ、音、形、色、手触りなどに気付き、感覚の働きを豊かにする」といった文言からも明らかのように、幼児の表現は、遊びや生活のなかで総合的に育まれていくからである。

こうした背景をふまえ、筆者らはこれまで、2015年より7年に渡って、保育者養成課程における保育内容「表現」に関する研究として、総合的な表現活動に焦点をあて教材開発を目指し検討してきた⁴⁾。これらの研究成果を活かし、現職保育者に対しても、専門的な知識・技能はもちろん、幼児期の表現の発達をふまえた指導上の留意点や問題点等、理論と実践を往還しながら、理解を深めることができる研修プログラムの開発を目指すこととなった。本研究は、その基礎研究として、現職保育者の表現に関する研修の実態を明らかにすることを目的とする。

II. 方法

表現に関する研修は、研修テーマや講師の専門性によって、音楽、造形、身体、言葉といった専門性に分化して実施される場合が多く、総

合的な表現の研修は行われていないのではない
か、表現に関する研修ニーズは、新任や中堅の
教員等にはあるが、管理職にはないのではない
か、という問いのもと、自治体と就学前施設を
対象として質問紙調査を実施した。

1. 自治体による表現に関する研修の実態調査

(1) 調査対象

都道府県教育委員会・幼児教育センター・総
合教育センター等 50 か所、政令都市の幼児教
育センター・総合教育センター20 か所、それ以
外の幼児教育センター11 か所、東京都 23 区
内の教育委員会等 10 か所、計 91 か所の幼児教
育に関する研修企画運営担当者。

(2) 調査時期

2021年2月から3月。

(3) 調査項目

2019年度に企画した幼児教育の研修のうち、
表現に関する研修について以下の3つを中心に
尋ねた。①表現に関する研修の時間数と対象人
数、②保育経験年数ごとの表現に関する研修内
容とその対象者、③研修の評価や実施形態、で
ある。

(4) 調査方法

質問紙の配布、回収ともに、郵送で行った。

2. 就学前施設等園内研修における表現に関する研修の実態調査

(1) 調査対象

全国の幼稚園・保育所・幼保連携型認定こ
ども園の 53 園の園内研修企画担当者。

(2) 調査時期

2021年2月から3月。

(3) 調査項目

2019年度に企画した表現に関する研修につ
いて、以下の3つを中心に尋ねた。①表現に関
する研修の時間数と対象人数、②保育経験年数
ごとの表現に関する研修内容とその対象者、③
研修の評価や実施形態、である。

(4) 調査方法

質問紙の配布、回収ともに、郵送で行った。

3. 倫理的配慮

本研究は、千葉大学教育学部生命倫理審査委
員会の承認（受付番号：第 122 号）を受けて実
施した。

III 結果と考察

1. 自治体による表現に関する研修の実態調査

調査用紙の回収数は 55 件（60.4%）であ
った。このうち、表現に関する研修を行ってい
ないと回答した 5 件を除き、結果にまとめた。

(1) 表現に関する研修の時間数

経験年数ごとの表現に関する研修時間につ
いて尋ねた結果を表 1 に示した。なお、経験年
数を跨いで実施した研修については、除外した。

表 1 表現に関する研修の時間数

| 経験年数が 1 年～4 年 の研修時間は、最大 で 28 時間、経験年数 | 最大時間 | 最小時間 |
|--|-------|--------|
| 1 年～4 年 | 28 時間 | 1.5 時間 |
| 5 年～8 年 | 9 時間 | 1.5 時間 |
| 9 年～12 年 | 24 時間 | 2.0 時間 |
| 13 年以上 | 12 時間 | 1.5 時間 |
| 園長等 | 12 時間 | 1.1 時間 |

経験年数 1 年～4 年と、9 年～12 年に比較的
多く実施されていた。いずれの経験年数におい
ても、最大時間と最小時間には大きな隔たりが
みられた。もっとも短い研修時間だったのは園
長等の研修で 1.1 時間、もっとも長い研修時間
を設けていたのは経験年数が 1 年～4 年を対象
とした 24 時間であった。

(2) 経験年数ごとの表現に関する研修内容

経験年数によって、どのような表現に関する
研修が行われているのか、研修対象者の経験年
数ごとに、各研修内容の実施の有無について回
答を求めた。各研修内容の項目については以下
の通りである。「3つの資質・能力と表現に関
する研修」、「主体的・対話的で深い学びと表
現に関する研修」、「幼児期の終わりまでに育
ってほしい姿と表現に関する研修」、「表現と
他領域との関わりに関する研修」、「乳児保育
における表

表 2 経験年数ごとの表現に関する研修内容

| 研修項目 | 経験年数 | | | | |
|-------------------------------|-------|-------|--------|-------|------|
| | 1年～4年 | 5年～8年 | 9年～12年 | 13年以上 | 園長等 |
| 1. 3つの資質・能力と表現に関する研修 | 34.5 | 16.4 | 20.0 | 16.4 | 9.1 |
| 2. 主体的・対話的で深い学びと表現に関する研修 | 32.7 | 16.4 | 18.2 | 16.4 | 9.1 |
| 3. 幼児期の終わりまでに育ってほしい姿と表現に関する研修 | 32.7 | 14.5 | 14.5 | 14.5 | 7.3 |
| 4. 表現と他領域との関わりに関する研修 | 12.7 | 9.1 | 9.1 | 9.1 | 3.6 |
| 5. 乳児保育における表現に関する研修 | 10.9 | 5.5 | 5.5 | 5.5 | 3.6 |
| 6. 表現における幼児理解に関する研修 | 34.5 | 21.8 | 21.8 | 21.8 | 16.4 |
| 7. 表現を通じた小学校との連携・接続に関する研修 | 12.7 | 9.1 | 9.1 | 9.1 | 3.6 |
| 8. ICTを活用した表現に関する研修 | 3.6 | 3.6 | 3.6 | 1.8 | 1.8 |
| 9. 特別な配慮を必要とする幼児と表現に関する研修 | 14.5 | 10.9 | 10.9 | 9.1 | 7.3 |
| 10. 歌唱表現実技研修 | 18.2 | 3.6 | 3.6 | 3.6 | 1.8 |
| 11. 器楽表現実技研修 | 10.9 | 1.8 | 1.8 | 1.8 | 0 |
| 12. 音楽づくり（即興・創作）実技研修 | 12.7 | 1.8 | 1.8 | 1.8 | 1.8 |
| 13. 手あそび実技研修 | 29.1 | 5.5 | 7.3 | 5.5 | 3.6 |
| 14. リズムあそび実技研修 | 36.4 | 7.3 | 10.9 | 7.3 | 5.5 |
| 15. ピアノ実技研修 | 1.8 | 1.8 | 3.6 | 1.8 | 1.8 |
| 16. 造形あそび実技研修 | 45.5 | 18.2 | 14.5 | 12.7 | 12.7 |
| 17. 絵画表現実技研修 | 29.1 | 16.4 | 14.5 | 12.7 | 9.1 |
| 18. 工作あそび実技研修 | 29.1 | 7.3 | 9.1 | 5.5 | 3.6 |
| 19. 粘土あそび実技研修 | 10.9 | 3.6 | 1.8 | 0 | 0 |
| 20. 演劇（シアター系）の実技研修 | 9.1 | 9.1 | 7.3 | 7.3 | 3.6 |
| 21. 運動あそび実技研修 | 36.4 | 10.9 | 7.3 | 5.5 | 9.1 |
| 22. ダンス実技研修 | 10.9 | 3.6 | 5.5 | 7.3 | 1.8 |
| 23. リトミック実技研修 | 9.1 | 1.8 | 0 | 0 | 0 |
| 24. 音楽表現と造形表現の総合的な実技研修 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| 25. 音楽表現と身体表現の総合的な実技研修 | 18.2 | 5.5 | 3.6 | 3.6 | 0 |
| 26. 造形表現と身体表現の総合的な実技研修 | 1.8 | 3.6 | 1.8 | 3.6 | 0 |
| 27. 幼児の表現事例研究（カンファレンス） | 9.1 | 3.6 | 5.5 | 5.5 | 5.5 |
| 28. その他（ ） | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 |

(%)

現に関する研修」、「表現における幼児理解に関する研修」、「表現を通じた小学校との連携・接続に関する研修」、「ICT を活用した表現に関する研修」、「特別な配慮を必要とする幼児と表現に関する研修」、「歌唱表現実技研修」、「器楽表現実技研修」、「音楽づくり（即興・創作）実技研修」、「手遊び実技研修」、「リズムあそび実技研修」、「ピアノ実技研修」、「造形あそび実技研修」、「絵画表現実技研修」、「工作あそび実技研修」、「粘土あそび実技研修」、「演劇（シアター系）の実技研修」、「運動あそび実技研修」、「ダンス実技研修」、「リトミック実技研修」、「音楽

表現と造形表現の総合的な実技研修」、「音楽表現と身体表現の総合的な実技研修」、「造形表現と身体表現の総合的な実技研修」、「幼児の表現事例研究（カンファレンス）」、「その他」の以上28項目である。集計結果を表2に示した。

経験年数1年～4年を対象とした研修で、もっとも多かったのは「造形あそび実技研修（45.5%）」、次いで「リズムあそび実技研修（36.4%）」、「運動あそび実技研修（36.4%）」が同率で、実技研修が多い傾向がみられた。特に、「リズムあそび実技研修」が上位に位置しているのは、この経験年数に特徴的であった。

経験年数 5 年～8 年を対象とした研修で、もっとも多かったのは「表現における幼児理解に関する研修 (21.8%)」、次に「造形あそび実技研修 (18.2%)」、そして「3 つの資質・能力と表現に関する研修」と「主体的・対話的で深い学びと表現に関する研修」、「絵画表現実技研修」が 16.4%であった。経験年数 5 年以降では、「表現における幼児理解に関する研修」等の幼児の表現の読み取り方に関する研修が上位となった。

経験年数 9 年～12 年で、もっとも多い研修は「表現における幼児理解に関する研修 (21.8%)」、次いで「3 つの資質・能力と表現に関する研修 (20%)」、「主体的・対話的で深い学びと表現に関する研修 (18.2%)」であった。経験年数が 13 年以上を対象とした研修においても、「表現における幼児理解に関する研修 (21.8%)」、次に「3 つの資質・能力と表現に関する研修」と「主体的・対話的で深い学びと表現に関する研修」が 16.4%となっており、経験年数 9 年～12 年と経験年数 13 年以上の研修内容は、上位項目が同様であった。

園長等を対象とした研修でもっとも多かったのは、「表現における幼児理解に関する研修 (16.4%)」、次に「造形あそび実技研修 (12.7%)」であった。

表現に関する研修は、キャリアステージを問わず悉皆研修として実施されている、という回答も見られたことから、園長等の役職者を対象とした研修でも、「造形あそび実技研修」といった実技研修が設定されていたことがわかる。

(3) 研修の実施形態

研修の実施形態について、講義、演習、省察をどのように組合わせて実施しているか、「講義のみ」、「講義+演習」、「演習+省察」、「講義+演習+省察」、「その他」のうち、当てはまるものすべてに回答を求めた (表 3)。

その結果、もっとも多い研修の実施形態は「講義+演習 (54.5%)」、次に「講義+演習+省察 (36.4%)」「講義のみ (16.4%)」であった。

表 3 研修の実施形態 (複数回答)

| 研修形態 | 割合 (%) |
|----------|--------|
| 講義+演習 | 54.5 |
| 講義+演習+省察 | 36.4 |
| 講義のみ | 16.4 |
| 演習+省察 | 5.5 |
| その他 | 3.6 |
| 無回答 | 16.4 |

(4) 研修内容やテーマを検討する上で重視していること

研修内容やテーマを検討する上で重視していることを把握するために、「研修対象者の所属」、「研修対象者の経験年数」、「研修の形態」、「定員」、「会場」、「日程や時間」、「予算」、「講師」、「広報」、「昨年度までの研修内容」、「研修対象者のニーズ」、「その他」の 12 項目について、「全く重視していない」、「あまり重視していない」、「どちらでもない」、「やや重視している」、「とても重視している」の当てはまるものについて回答を求めた。

その結果、80.0%が「講師」を「とても重視」していた。「講師」を除き、「やや重視している」、「とても重視している」を合算してみると、もっとも高い割合となった項目は「対象者のニーズ (89.1%)」、次いで「昨年度までの研修内容 (87.3%)」、「日程や時間 (85.5%)」、「研修の形態 (83.6%)」、「研修対象者の経験年数」、「予算」がそれぞれ 76.4%であった。受講者のニーズに応じた研修内容とその研修内容にふさわしい講師の選定、そして「昨年度までの研修内容」の反映を重視していることが考えられた。

2. 就学前施設等園内研修における表現に関する研修の実態調査

調査用紙の回収数は幼稚園 1 件、保育所 26 件、幼保連携型認定こども園 2 件、計 29 件 (54.7%) であった。29 件のうち、表現に関する研修を実施していないと回答した 6 件を除き、以下の結果にまとめた。

(1) 表現に関する研修の時間数

表現に関する研修時間について尋ねた結果を表4に示した。

経験年数にかかわらず、もっとも短い研修時間では1時間、もっとも長い研修時間は1年～4年、園長等の20時間であった。

表4 表現に関する研修の時間数

| 経験年数 | 最大時間 | 最小時間 |
|--------|------|------|
| 1年～4年 | 20時間 | 1時間 |
| 5年～8年 | 10時間 | 1時間 |
| 9年～12年 | 12時間 | 1時間 |
| 13年以上 | 10時間 | 1時間 |
| 園長等 | 20時間 | 1時間 |

園によって、すべての経験年数に該当者がいるとは限らないことから、単純にキャリアステージごとの研修時間数を比較することは難しい。また、経験年数というよりは園全体での表現に関する研修の取り組み時間の差であることも考えられる。

(2) 経験年数ごとの表現に関する研修内容

経験年数によって、どのような表現に関する研修が行われているのか、研修対象者の経験年数ごとに、各研修内容の実施の有無について回答を求めた。各研修内容の項目については以下の通りである。「3つの資質・能力と表現に関する研修」、「主体的・対話的で深い学びと表現に関する研修」、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿と表現に関する研修」、「表現と他領域との関わりに関する研修」、「乳児保育における表現に関する研修」、「表現における幼児理解に関する研修」、「表現を通じた小学校との連携・接続に関する研修」、「ICTを活用した表現に関する研修」、「特別な配慮を必要とする幼児と表現に関する研修」、「歌唱表現実技研修」、「器楽表現実技研修」、「音楽づくり（即興・創作）実技研修」、「手遊び実技研修」、「リズムあそび実技研修」、「ピアノ実技研修」、「造形あそび実技研修」、「絵画表現実技研修」、「工作あそび実技研

修」、「粘土あそび実技研修」、「演劇（シアター系）の実技研修」、「運動あそび実技研修」、「ダンス実技研修」、「リトミック実技研修」、「音楽表現と造形表現の総合的な実技研修」、「音楽表現と身体表現の総合的な実技研修」、「造形表現と身体表現の総合的な実技研修」、「幼児の表現事例研究（カンファレンス）」、「その他」以上28項目である。結果を表5に示した。

経験年数1年～4年でもっとも多い研修は「乳児保育における表現に関する研修（44.8%）」、次いで「主体的・対話的で深い学びと表現に関する研修」、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿と表現に関する研修」、「手あそび実技研修」が34.5%、続いて「リズムあそび研修（31%）」、「表現における幼児理解に関する研修」「特別な配慮を必要とする幼児と表現に関する研修」がそれぞれ24.1%であった。

経験年数5年～8年を対象とした研修で、もっとも多かった研修は「乳児保育における表現に関する研修（34.5%）」、次に「特別な配慮を必要とする幼児と表現に関する研修（31.0%）」、「主体的・対話的で深い学びと表現に関する研修」と「リズムあそび実技研修」がそれぞれ27.6%、続いて「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿と表現に関する研修（24.1%）」、「手遊び実技研修（20.7%）」であった。

経験年数9年～12年では「特別な配慮を必要とする幼児と表現に関する研修（24.1%）」がもっとも多く、次いで「乳児保育における表現に関する研修」と「手遊び実技研修」がともに20.7%、続いて「表現における幼児理解に関する研修」と「主体的・対話的で深い学びと表現に関する研修」がともに17.2%、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿と表現に関する研修」が13.8%であった。

経験年数13年以上を対象とした研修では「リズムあそび実技研修（17.2%）」、次いで「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿と表現に関する研修」、「乳児保育における表現に関する

表 5 経験年数ごとによる表現に関する研修内容

| 研修項目 | 経験年数 | | | | |
|-------------------------------|-------|-------|--------|-------|------|
| | 1年～4年 | 5年～8年 | 9年～12年 | 13年以上 | 園長等 |
| 1. 3つの資質・能力と表現に関する研修 | 10.3 | 13.8 | 6.9 | 6.9 | 24.1 |
| 2. 主体的・対話的で深い学びと表現に関する研修 | 34.5 | 27.6 | 17.2 | 10.3 | 31.0 |
| 3. 幼児期の終わりまでに育ってほしい姿と表現に関する研修 | 34.5 | 24.1 | 13.8 | 13.8 | 24.1 |
| 4. 表現と他領域との関わりに関する研修 | 17.2 | 13.8 | 6.9 | 3.4 | 10.3 |
| 5. 乳児保育における表現に関する研修 | 44.8 | 34.5 | 20.7 | 13.8 | 20.7 |
| 6. 表現における幼児理解に関する研修 | 24.1 | 13.8 | 17.2 | 6.9 | 10.3 |
| 7. 表現を通じた小学校との連携・接続に関する研修 | 6.9 | 10.3 | 3.4 | 6.9 | 13.8 |
| 8. ICTを活用した表現に関する研修 | 13.8 | 10.3 | 6.9 | 6.9 | 13.8 |
| 9. 特別な配慮を必要とする幼児と表現に関する研修 | 24.1 | 31.0 | 24.1 | 13.8 | 27.6 |
| 10. 歌唱表現実技研修 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| 11. 器楽表現実技研修 | 6.9 | 6.9 | 3.4 | 0 | 3.4 |
| 12. 音楽づくり（即興・創作）実技研修 | 6.9 | 3.4 | 3.4 | 0 | 3.4 |
| 13. 手あそび実技研修 | 34.5 | 20.7 | 20.7 | 6.9 | 10.3 |
| 14. リズムあそび実技研修 | 31.0 | 27.6 | 10.3 | 17.2 | 17.2 |
| 15. ピアノ実技研修 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| 16. 造形あそび実技研修 | 17.2 | 17.2 | 10.3 | 3.4 | 13.8 |
| 17. 絵画表現実技研修 | 3.4 | 3.4 | 3.4 | 0 | 6.9 |
| 18. 工作あそび実技研修 | 3.4 | 0 | 0 | 0 | 3.4 |
| 19. 粘土あそび実技研修 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| 20. 演劇（シアター系）の実技研修 | 3.4 | 3.4 | 0 | 3.4 | 3.4 |
| 21. 運動あそび実技研修 | 17.2 | 17.2 | 10.3 | 6.9 | 13.9 |
| 22. ダンス実技研修 | 6.9 | 6.9 | 3.4 | 0 | 3.4 |
| 23. リトミック実技研修 | 3.4 | 3.4 | 3.4 | 3.4 | 6.9 |
| 24. 音楽表現と造形表現の総合的な実技研修 | 3.4 | 3.4 | 3.4 | 0 | 3.4 |
| 25. 音楽表現と身体表現の総合的な実技研修 | 3.4 | 3.4 | 0 | 0 | 0 |
| 26. 造形表現と身体表現の総合的な実技研修 | 3.4 | 0 | 3.4 | 0 | 3.4 |
| 27. 幼児の表現事例研究（カンファレンス） | 3.4 | 6.9 | 0 | 0 | 6.9 |
| 28. その他（ ） | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 |

(%)

研修」、「特別な配慮を必要とする幼児と表現に関する研修」がそれぞれ 13.8%であった。経験年数 13 年以上の実施の割合が低いのは、園に該当する経験年数の保育者がいないことによるものと推察される。

園長等を対象とした研修でもっとも多かったのは「主体的・対話的で深い学びと表現に関する研修（31.0%）」、続いて「特別な配慮を必要とする幼児と表現に関する研修（27.6%）」、次いで「3つの資質・能力と表現に関する研修」と「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿と表現に関する研修」がそれぞれ 24.1%、「乳児保育における表現に関する研修（20.7%）」、「リ

ズムあそび実技研修（17.2%）」であった。

園内研修では、キャリアステージごとというよりは、園全体で取り組むことが多いため、全体的に理論をふまえた研修が上位になったと推察される。一方で、実技研修についても一定数みられるのは、園内研修が理論と実技をバランスよく取り入れて実施されているといえよう。

（3）研修の実施形態

研修の実施形態について、講義、演習、省察をどのように組合わせて実施しているか、「講義のみ」、「講義＋演習」、「演習＋省察」、「講義＋演習＋省察」、「その他」のうち、当てはまるものすべてに回答を求めた。

その結果、もっとも多かったのが「講義+演習」の37.9%、「講義+演習+省察」が20.7%、「講義のみ」が17.2%、「演習+省察」が10.3%であった。「講義+演習」と「講義+演習+省察」で5割を超えていることから、講師からの講義を受けるとともに、受講生がワークを行うことで自身の表現を振り返ったり、保育における表現を再考したりする契機となったと考えられる。

(4) 研修内容やテーマを検討する上で重視していること

研修内容やテーマを検討する上で重視していることを把握するために、「研修対象者の担当年齢」、「研修対象者の経験年数」、「研修の形態」、「定員」、「会場」、「日程や時間」、「予算」、「講師」、「広報」、「昨年度までの研修内容」、「研修対象者のニーズ」、「その他」の12項目について、「全く重視していない」、「あまり重視していない」、「どちらでもない」、「やや重視している」、「とても重視している」のうち当てはまるものについて回答を求めた。その結果、「日程や時間」について、「とても重視している(20.7%)」、「やや重視している(58.6%)」の回答が合わせて8割弱となっていることは、忙しい保育者にとって日程や時間をすり合わせることの難しさを読み取ることができる。「研修対象者のニーズ」についても「とても重視している(34.5%)」、「やや重視している(44.8%)」と合わせて8割近く、その「研修形態」についても、「とても重視している(20.7%)」、「やや重視している(51.7%)」と合わせて7割超であったことから、園内研修では、研修対象者のニーズに合わせて、研修形態を考慮しつつ、日程や時間を調整していることが推測できる。

IV まとめ

本研究の結果から明らかになったのは、以下の3点である。

1. 自治体における表現に関する研修は、初任者研修・中堅教諭等資質向上研修に含まれる

表現に関する研修は、経験年数1年～4年と、9年～12年に比較的多く実施されていたが、1年～4年の枠には、法定研修である初任者研修、教職2年目研修が含まれていること、9年～12年には、中堅教諭等資質向上研修が含まれていることから、悉皆研修の一部として実施されていることがうかがえる。文部科学省が実施している教員研修のうち、初任者研修の実施状況(平成30年度)⁵⁾をみると、幼稚園、幼保連携型認定こども園における38項目の研修内容の、例えば「遊びを通した総合的な指導」や「主体的・対話的で深い学び(アクティブ・ラーニング)」、「幼児理解」といった項目の一部に表現に関する研修が含まれていると推察される。

2. 自治体における表現に関する研修には専門性を高める実技研修が含まれる

経験年数1年～4年に実技研修が多く見られたのは、経験年数が浅い保育者にとって、研修を通して幼児理解や保育実践等の基礎的な指導力を身に付けることを目的としていると推察する。しかしながら、こうした実技研修は経験年数にかかわらず、専門研修として位置付けられているようである。例えば、札幌市幼児教育センターによる令和3年度の研修案内では、初任者研修は教職経験に応じた研修として位置付け、同時に、職能に応じた研修として、保育実践研修も位置付けられている。そこでは、「保育に生かせる造形遊び」や「講義・実技：保育に生かせる運動遊び」といった研修が開設されている⁶⁾。大阪市保育・幼児教育センターによる令和3年度の研修計画では、専門研修のひとつに、領域別に講話や実技を学ぶ中で、保育者としての資質・専門性の向上と日々の教育・保育の充実を図ることをねらいとして実施されている⁷⁾。令和2年度には、1つのテーマを多面的に捉え知見を広げることを目的として、玩具や運動あそび、わらべうた等の講座が開設されていた。このように、それぞれ自治体によって、保育者の専門性を高める実技研修が開設されている。

3. 就学前施設における表現に関する研修は、乳児保育や特別な配慮を必要とする幼児など、幼児の発達や障害の特性をふまえた表現に関する研修が求められている

特別な配慮を必要とする幼児に関する研修ニーズが高いことは明らかとなっている⁸⁾。また、幼保合同研修においても、「特別支援教育」に関する研修が上位に位置付いており⁹⁾、表現に関する研修についても、幼児の発達や障害の特性をふまえた研修が求められている。

課題については次の2点があげられる。

1. 総合的な表現に関する研修の必要性

自治体による研修、就学前施設による園内研修、いずれにおいても、音楽表現と造形表現を組み合わせた総合的な表現に関する研修は実施されていなかった。幼児の日常的な行為のなかに見られる表現をいかに読み取り、受け止め、それを発展させたり、共有したりすることができるか、こうした実践力を身に付けるために、総合的な表現という視点を持つ必要がある。

2. 研修担当部署の早期一元化

本研究の調査を依頼する際、自治体による研修の担当部署が多岐に渡っていた。文部科学省が、幼児教育の推進体制構築事業として、地方公共団体に「幼児教育アドバイザー」の育成、「幼児教育センター」の設置を委託したのが2016年であり、幼児教育センターは、幼児教育の内容・指導方法等に関する調査研究や、幼稚園教諭・保育士・保育教諭や幼児教育アドバイザーに対する研修機会の提供等を行う地域の拠点である¹⁰⁾。令和元年度幼児教育実態調査によれば、幼児教育センターを既に設置している都道府県は19都道府県(40.4%)、市町村は79市町村(4.6%)となっており¹¹⁾、全国的に幼児教育センターが設置されてはいない。その結果、研修担当部署も一元化されず多岐に渡り、幼児教育センター以外への調査が必要となった。また、幼稚園と保育所の担当部署も一元化されていない自治体が多い¹²⁾。

本調査の結果をふまえ、今後は表現に関する

専門的な知識・技能だけでなく、幼児の発達や特性をふまえた表現の総合的な表現教育研修プログラムの開発を目指していきたい。

謝辞

質問紙調査に快くご協力くださった自治体の研修企画運営ご担当部署の皆様、就学前施設の研修企画ご担当の皆様には厚くお礼申し上げます。

付記

本研究は公益財団法人日本教育公務員弘済会、令和2年度日教弘本部奨励金の助成を受けて実施した。

注

¹⁾ 平成27年12月、中央教育審議会答申「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について～学び合い、高め合う教員育成コミュニティの構築に向けて～」より、「2. これからの時代の教員に求められる資質能力」p.9-10

²⁾ 詳細については、一般社団法人保育教諭養成課程研究会(2015)平成27年度文部科学省委託「幼児教育の質向上に係る推進体制等の構築モデル調査研究」報告書「新採ギャップ」に関する研究—中堅教員と園長の比較調査を通して—、同研究会(2016)平成28年度文部科学省委託「幼児期の教育内容等深化・充実調査研究」報告書「幼稚園等におけるミドルリーダーの実態調査」、同研究会(2017)平成29年度文部科学省委託「幼児期の教育内容等深化・充実調査研究」報告書「幼稚園等におけるミドルリーダー後期の実態と課題—中堅教員と園長の比較調査を通して—」、同研究会(2018)平成30年度文部科学省委託「幼児期の教育内容等深化・充実調査研究」報告書「園長、幼児教育アドバイザー、指導力向上のための研修モデルの構築にむけて、以上4年間の調査研究報告書を参照のこと。

³⁾ 詳細は、一般社団法人保育教諭養成課程研究

会(2019)令和元年度文部科学省委託「幼児教育の教育課題に対応した指導方法等充実調査研究」報告書 幼稚園教諭等のキャリアステージごとの育ちと都道府県・政令市・中核市における研修の実態、を参照のこと。

- 4) 筆者らは日本保育学会において、2015年「保育者養成における総合的な表現活動の試み(1)・(2)」、2016年「保育者養成課程における表現教育に関する研究(1)・(2)」、2017年「保育者養成課程における表現教育に関する研究(3)・(4)」、2018年「保育者養成課程における表現教育に関する研究(5)・(6)」と研究発表しており、こうした研究の成果は、島田・駒共編者による『コンパス保育内容表現』(2019年・建帛社)等にまとめており、2020年以降も共同で研究発表を継続している。
- 5) 文部科学省 HP より「教員研修」の「初任者研修実施状況(平成30年度)」調査結果について⁹⁾のなかで、幼稚園・幼保連携型認定こども園における研修の内容として38項目あげ、教育委員会、自治体による実施状況の割合を報告している。
- 6) 詳細については、札幌市幼児教育センター 令和3年度研修案内を参照のこと。
<<https://www.city.sapporo.jp/kyoiku/youjikyousenn/documents/r3kennsyuuuannnai.pdf>> (閲覧日 2021年8月29日)
- 7) 詳細については、令和3年度大阪市保育・幼児教育センター研修計画を参照のこと。
<<https://www.city.osaka.lg.jp/kodomo/cmsfiles/contents/0000427/427540/r3keikaku.pdf>> (閲覧日 2021年8月29日)
- 8) 詳細については、注³⁾の文献を参照のこと。
- 9) ベネッセ教総合育研究所が2009年度に実施した「認定こども園における研修の実情と課題」より、「第2章 地方自治体等における保育者研修」によれば、幼保合同研修のテーマには「保幼小の連携」や「特別支援教育」が上位であることがわかる。

<https://berd.benesse.jp/jisedaiken/research/pdf/research14_5.pdf> (閲覧日 2021年8月29日)

- 10) 文部科学省 HP より「幼児教育の推進体制構築事業」の事業の趣旨に、幼児教育センターについて述べられている。
<https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/youchien/1372594.htm> (閲覧日 2021年8月29日)
- 11) 文部科学省初等中等教育局幼児教育課による「令和元年度幼児教育実態調査」より、「4. 幼児教育センターの設置・幼児教育アドバイザーの配置状況」を参照した。
<https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afieldfile/2020/01/30/1278591_06.pdf> (閲覧日 2021年8月29日)
- 12) 注⁹⁾で引用した「認定こども園における研修の実情と課題」より、「第2章 地方自治体等における保育者研修」によれば、公立幼稚園、私立幼稚園、公私営保育所の担当部署について、都道府県では、「すべて別の担当部署である」と71.4%が回答し、政令市では、58.3%が「すべて別の担当部署である」と回答していたが、12年経った2021年においても、改善の余地がある。

引用文献

- 伊藤仁美(2015)保育現場で求められているリズム遊びの指導法に関する一考察—N区保育者対象「保育技術研修」を通して—, こども教育宝仙大学紀要, 6, 27-33.
- 本山益子・渡邊友子(2018)身体表現の園内研修—保育者対象の実技講習より—, 京都文教短期大学研究紀要, 56, 95-102.
- 本山益子・渡邊友子(2021)身体表現の園内研修II—保育者の実践より—, 京都文教短期大学研究紀要, 59, 105-113.
- 中島法晃(2020)造形指導に不安を抱える保育

者にとって有効な表現素材と活用のあり方
～保育者研修会のワークショップ事例を通
して～, 岐阜女子大学紀要, 49, 59-65.

清水桂子 (2013) 保育者研修および保育実践か
ら構築する研修内容 [音楽表現活動] の展開,
北翔大学短期大学部研究紀要, 51, 67-75.

Survey of Training on Expression for Preschool Teachers

For preschool teachers to continue learning as highly specialized professionals, the development of training is an urgent issue. Although there is broad training on expression for preschool teachers, there has been no survey on expression training specifically. Therefore, this study aims to clarify the situation of training on expression for preschool teachers. A questionnaire survey was conducted among those in charge of training management at local governments and those in charge of planning in-school training at preschool facilities. The results showed that “training on understanding young children in expression” was the most implemented training in local governments in all years of experience, while “training on expression in infant care” and “training on young children with special needs and expression” were the most implemented in preschool training. In both cases, the training predominantly consisted in a back-and-forth between theory and practice, and the evaluation was mainly based on questionnaires prepared by the planners. The common issue was that there was almost no training on comprehensive expression, suggesting the need to develop such a training program.